

DXの進め方について

# DXレポートのまとめ

		2015年時点 (調査時点)	2025年予測 (10年後)
利用 年数	21年以上	20%	60%
	11年～20年	40%	—
レガシーシステム全体の 損失金額		4.96兆円	—
人為ミス以外の障害発生		79.6%	
レガシーシステムが原因の 損失金額		約4兆円	約12兆円

3倍

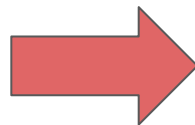
$4.96 \text{ 兆円} \times 79.6\%$

損失も3倍

DXとは？

## OA開発

オフィス業務の自動化を目的。  
ユーザが業務を行う前提。  
業務フローはユーザ主体。

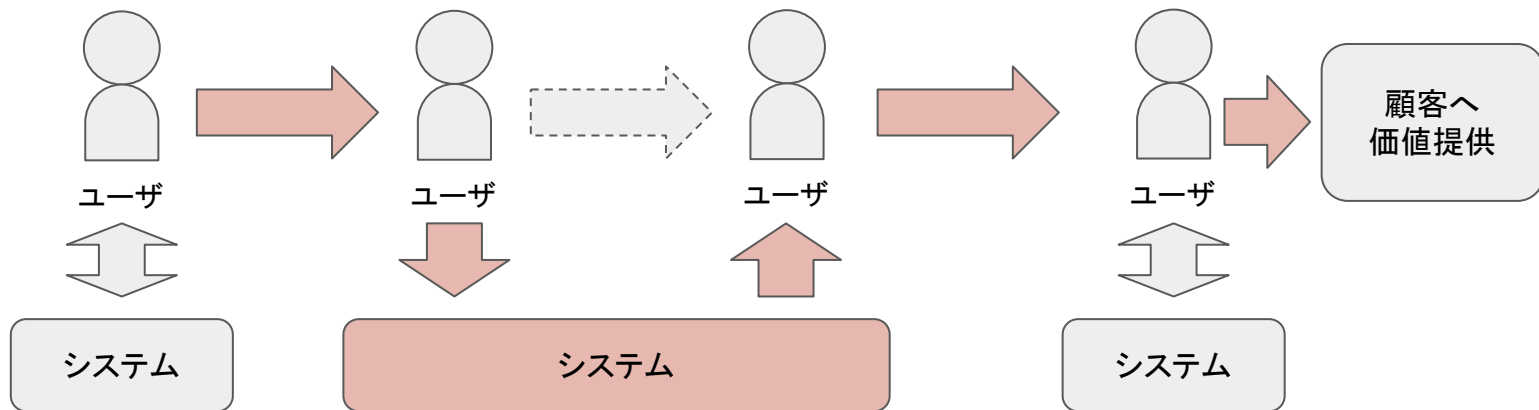


## DX開発

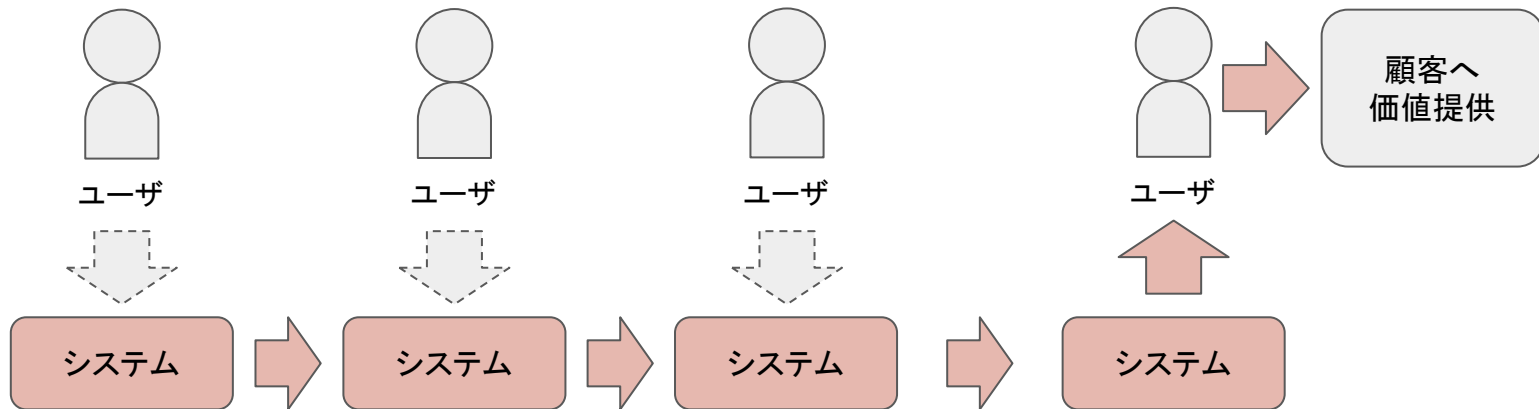
業務フローの改革。  
ITのみで業務が完結。  
ユーザは確認や新規業務開発を実施。

ユーザ(人間)が業務を行うところから、ITが業務を行う状態に変革することがDX

## 現状



## DX後



DXの必要性について  
～結論「必要です」～

現状の課題

今の選択

選択後の未来

システムの老朽化  
複雑化している  
改修コストの増大  
最新技術を利用できない  
調査コストの増加  
テスト工数の増加  
定期的なEOL対応

など

改修リスクから現状維持  
RPAなど周辺で対応

短期的には最適

さらなる複雑化  
改修不能になる

長期的にNG

最新技術で再構築  
DXドリブンで対応

短期的には大変

機動的なビジネス開発  
障害の無いシステム

長期的に最良

現状  
維持の  
結果

DXの  
結果



DXのコストについて

この領域に注目が  
集まりがち

現状維持

システム刷新

既存機能構築

すでにあるためほぼゼロ

機能を刷新するため  
コストは必要

機能増強  
エンハンス

古い技術の活用のため  
高コスト化する

最新技術を活用可能  
低コスト化する

ビジネス対応速度

複雑なシステムのため  
かんたんな改修が困難

システムを疎結合して  
いるため対応が楽

障害対応コスト

調査が難化  
原因究明に時間が必要

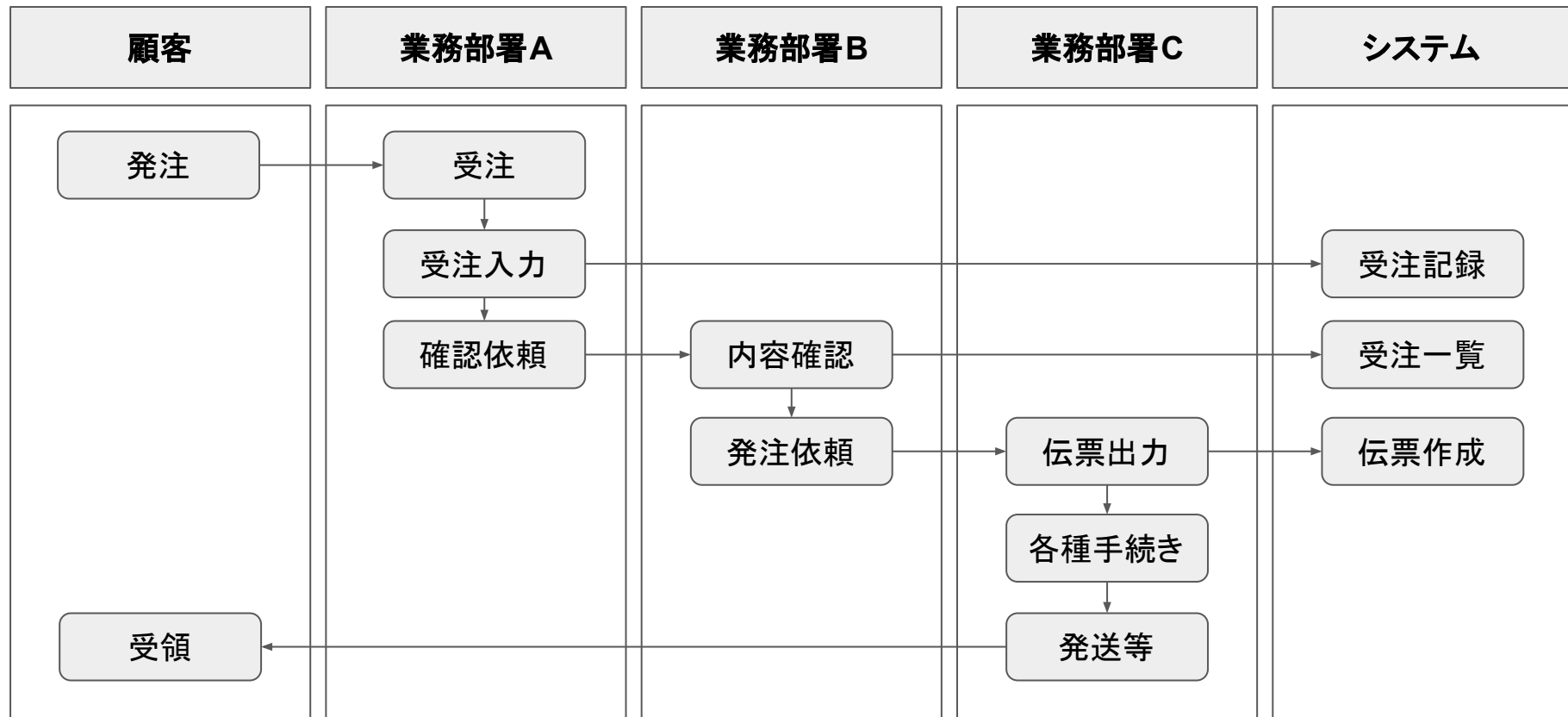
システムが簡素化するため  
調査時間の短縮

# DXの進め方

	現時点		向かうべき先
業務面	ユーザ中心の業務	As-Is・To-Be分析をして 業務改革を行う。	IT中心の業務
アプリケーション	モノリシック アプリケーション	適宜システムを 機能ごとに分離	マイクロサービス アプリケーション
プロジェクト 運営	ウォーターフォールな プロジェクト運営	機動的な プロジェクト運営に変化	アジャイルな プロジェクト運営
IT技術	古いテクノロジー	アーキテクチャを見直し 技術の取り込みを可能に	最新テクノロジー

# AS-IS分析

# AS-ISの整理



# 業務ヒアリングシート(トリガー)

業務開始 トリガー	トリガー	連絡が来る・時間になったら
	チャネル	電話・システム通知
	連絡元部署	顧客・××課 △△担当者
	その他	毎朝8:00頃

# 業務ヒアリングシート(実施事項)

業務実施 詳細	実施内容	××の入力を行う。
	システム	AAAシステムを利用している
	画面・機能	「在庫確認画面」「注文入力画面」
	目的	〇〇を管理するため・依頼するため
	業務詳細	先方より連絡を受けたら AAA〇〇画面で在庫確認を行い 在庫に問題がなければ入力行う
	異例時対応	上長に連絡のうえ、顧客へ連絡
	その他	



# 業務ヒアリングシート(後続業務)

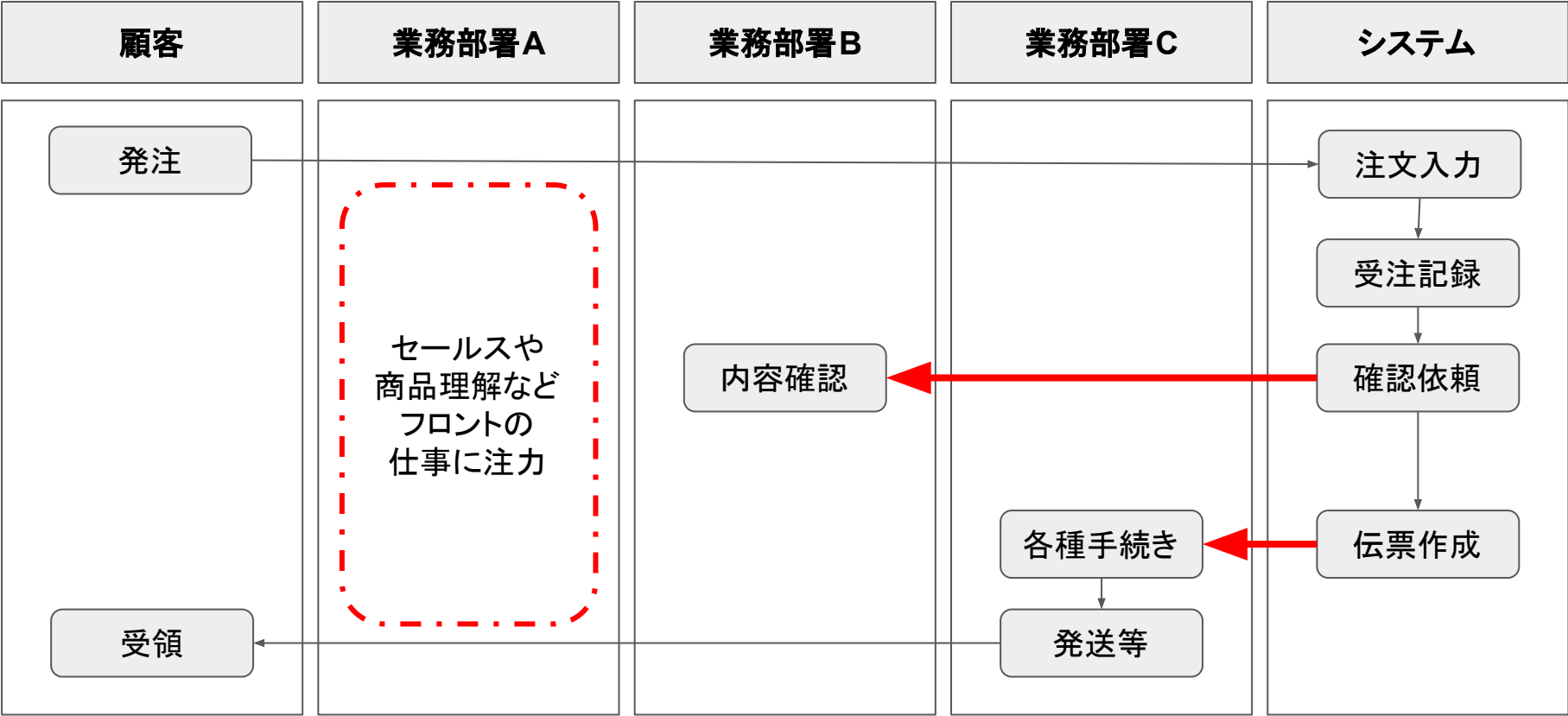
業務完了 後続作業	実施内容	××の確認依頼を行う
	チャネル	管理部署へメールを送付・特に何もしない
	依頼先部署	〇〇課 管理担当者
	その他	17:00頃一括で・月末に一括で

TO-BE整理

# TO-BEの整理

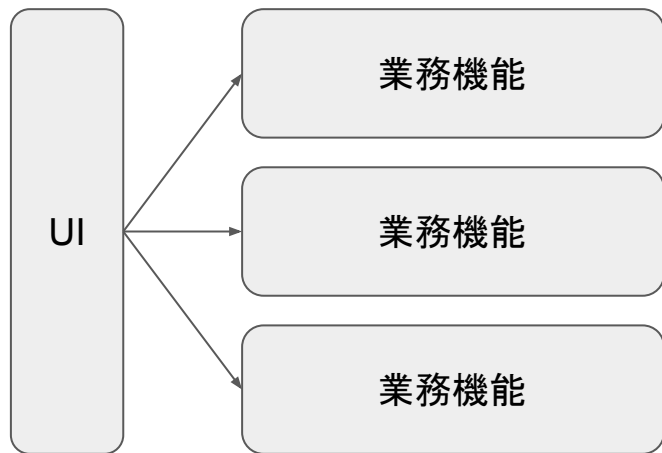


# 完全システム化した場合



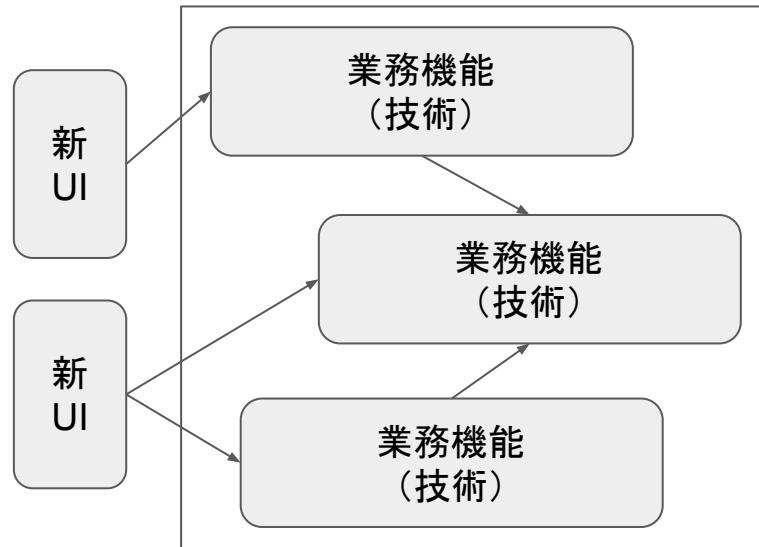
モノリスからマイクロサービス

## モノリシック アーキテクチャ



単一の技術  
(言語／フレームワーク)

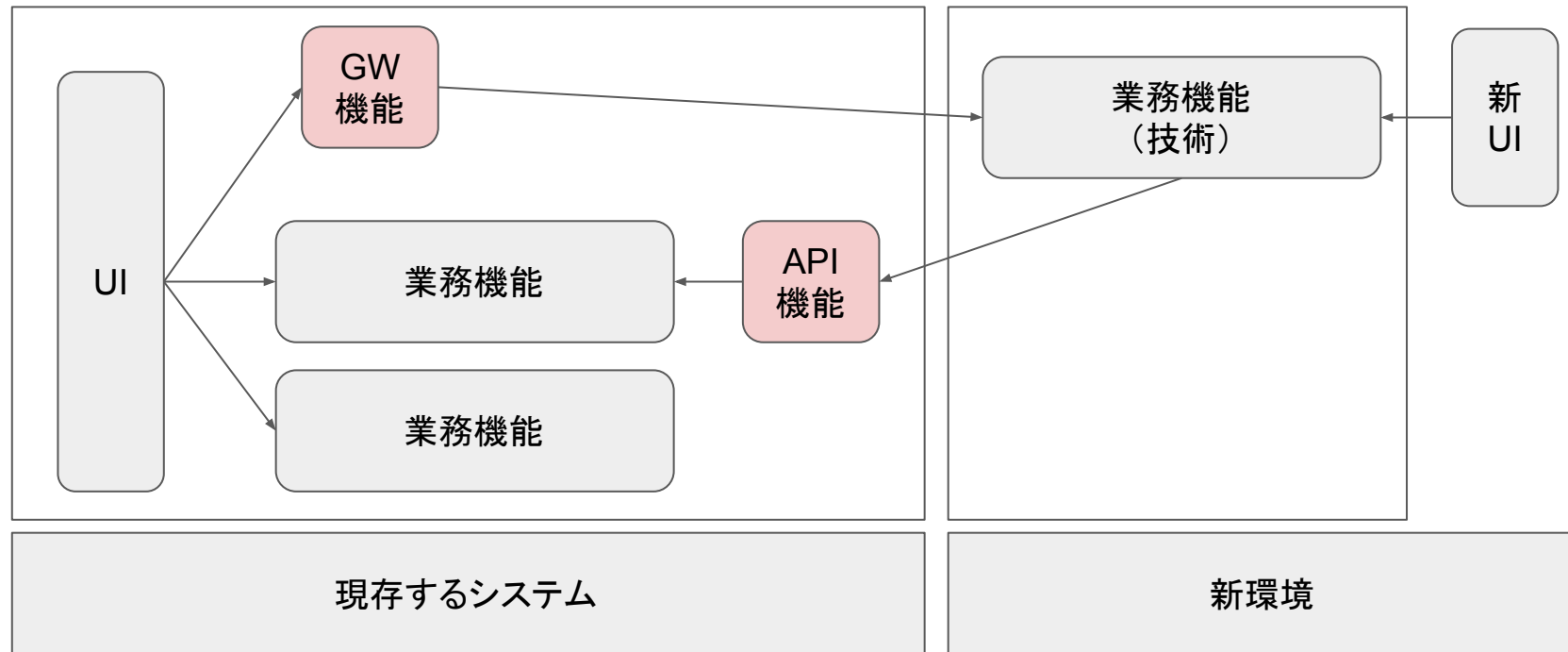
## マイクロサービス アーキテクチャ



UIは  
適宜分離

技術が選択可能な  
共通プラットフォーム

## モノリシックからマイクロサービスへの移行方針



# マイクロサービスの単位

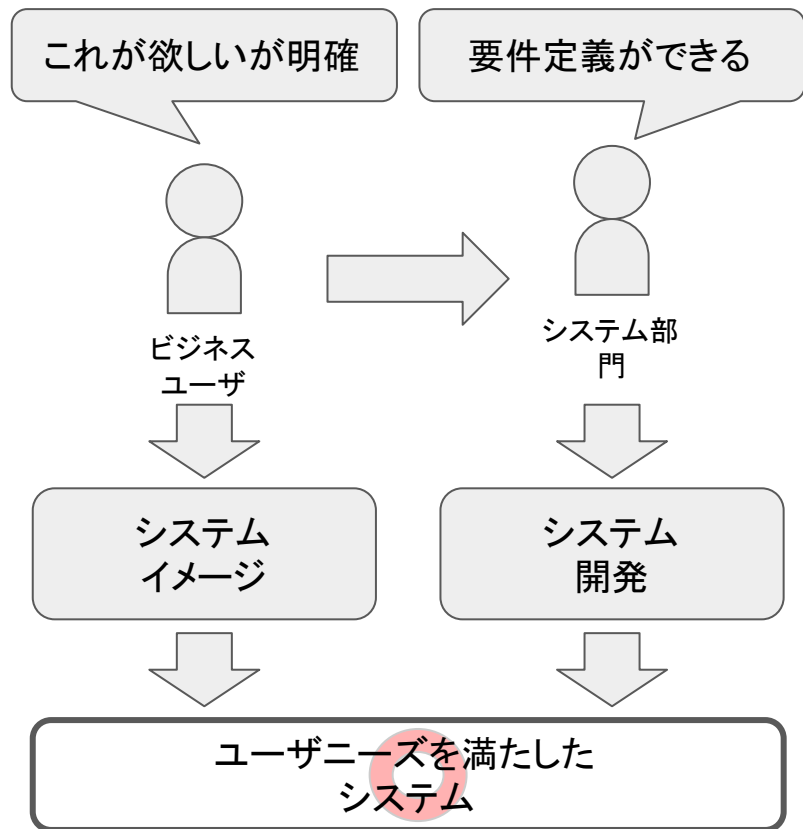
			業務種別		
			商品A	商品B	商品C
データ 種別	トランザクション		商品A トランザクション 管理	商品B トランザクション 管理	商品C トランザクション 管理
	マスタ	商品	商品A 商品管理マスタ	商品B 商品管理マスタ	商品C 商品管理マスタ
		顧客	顧客管理マスタ		
		取引先	取引先管理マスタ		

この単位で  
ヒアリングシートを  
マッピングしていく

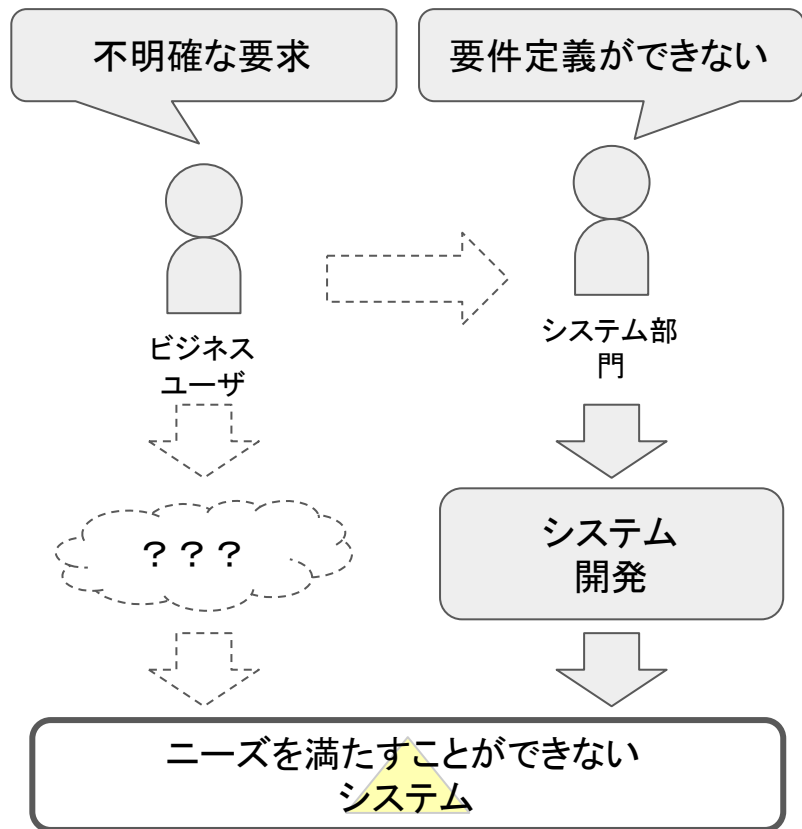


機動的なプロジェクト運営に向けて

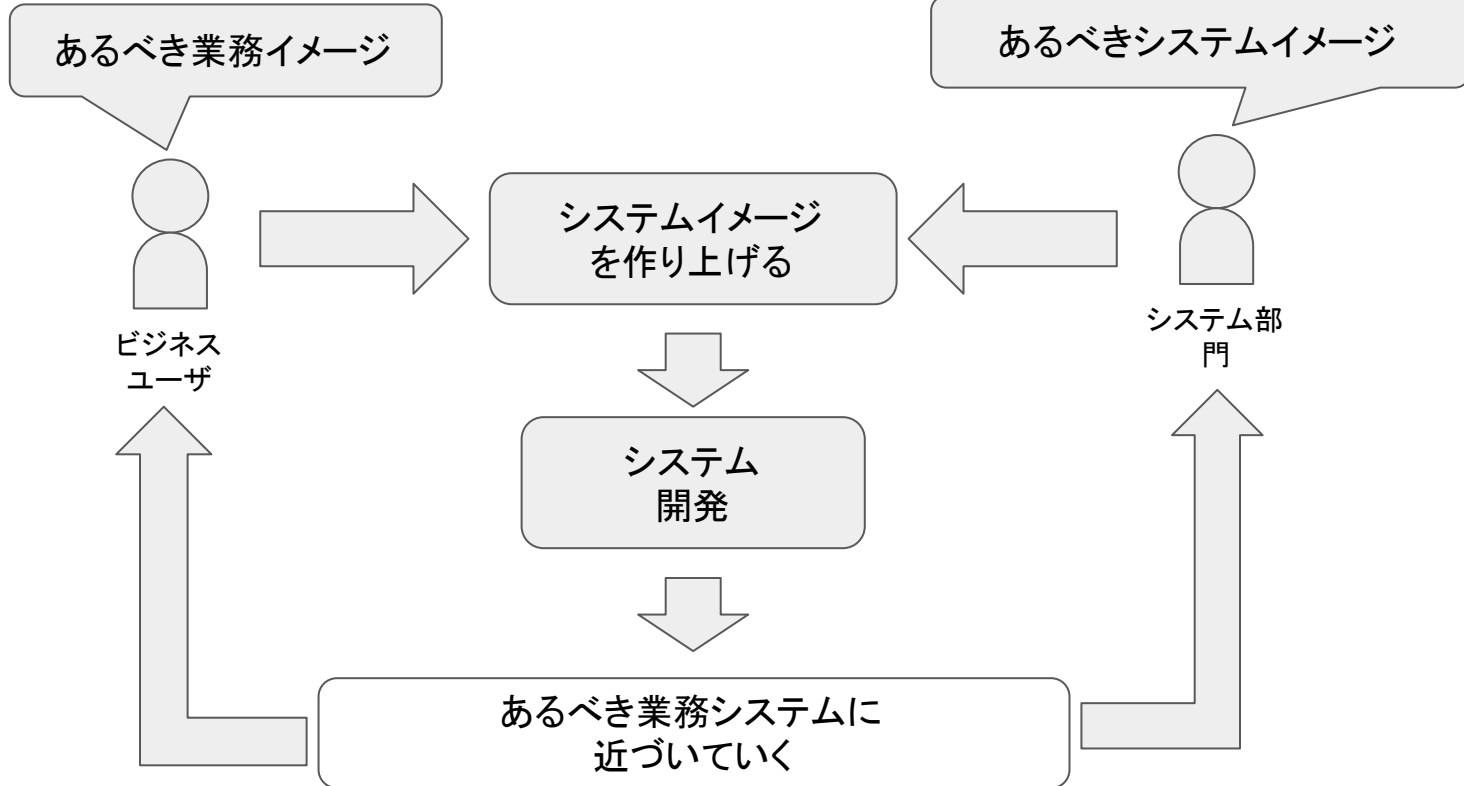
## 以前のシステム開発



## 現状のシステム開発



## これからのシステム開発



データドリブンな会社へ

